

mechanical の英語の意味

目次

第1節 レイモンド・ウィリアムズ『キーワード辞典』

第2節 アニミズムからの脱却

第3節 『キーワード辞典』の「メカニカル」

第1節 レイモンド・ウィリアムズ『キーワード辞典』

1984年秋に一ヶ月半ほど英国各地の大学を訪問したが、半分ほど過ごしたケンブリッジの街の書店で横積みされた、いかにもベストセラー風の小型の本に目が止まった。これが

Raymond Williams, “Keywords---- A vocabulary of culture and society”、Flamingo,1976, revised and expanded in 1983

である。辞典だから一項目に1～2ページの分量で書かれており、拾い読み出来るので、便利な参考本として重宝してきた。短文なので英語でも読みやすい。その後、レイモンド・ウィリアムズ『完訳 キーワード辞典』（椎名ほか訳、平凡社、2002年）という翻訳本が発行されている。このキーワード本の「メカニカル」項目の全文を第3節につけてある。

これを読んで自分には思いがけない二つのことに気づいた。

1 これを見るまでは、「メカニカル」は具象的な機械が語源で、後に抽象的な「力学」に相当する理論概念に拡大されてきたと想像していた。しかし、この二つは独立なものであることが意外であった。

2 機械みたいなものが登場した時点から、「メカニカル」には社会身分的に蔑視の色合いが付随していたが、19世紀、産業社会でまた変容した。蔑視には「決まりきった、思考力を働かせない行動」で結びつく。

3 現代の理論概念としての「力学」の意味はボイルの「むしろこの語をもっと広い意味で、つまり下位の物体に運動を起こしたり、その運動の形を変えることを目的に、純粋数学を応用することからなる学問領域、力学をさすものとして考えていく。」で既に登場していることがわかる。ボイルはニュートンの少し先輩

だが同時代を生きている。

第2節 アニミズムからの脱却

ここからは文献的裏付けのない推論である。

自然物（生物も無生物もひっくるめて）に魂や精霊が宿ると見るアニミズムは、それら自然物の振る舞いを自分の気持ちになぞらえて解釈した。しかし、明確に人間が作った道具とかは別物にも見えた。この人工物が時計のように次第に複雑化してくると、気持ちのないそれらが何によって秩序を維持しているのかに目がいく。そこにボイルがいうように数学的な原理で支えられているものとして考察が始まった。

はじめ「心がない」「ものを考えない」初期の機械を扱う仕事は、教師や牧師のように「心ある」人間を扱う仕事より下等な仕事に位置付けられた。しかし機械文明が社会を動かすようになった産業社会の到来は、「メカニカル」は数学的論理を超えた、汎神論的な人間社会を超越した存在に秩序の根拠をみる見方も生まれた。唯物論も人間を超越した存在に秩序を求める意味で汎神論に通ずる。初期に「メカニカル」はアニミズムから逸脱したものとして例外的に措定されたが、サイエンスの拡張によって主客は逆転して、「メカニカル」の中にアニミズムが隠棲するようになった。

これは一つの推測であるが、その展開を追々考えてみる。

第3節『キーワード辞典』の「メカニカル」

レイモンド・ウイリアムズ『完訳 キーワード辞典』椎名美智・武田ちあき・越智博美・松井優子訳、平凡社、2002年、の201-202ページ：

mechanical メカニカル・機械的・機械論的

現在では mechanical という語の主たる意味とニュアンスは、一見「機械(machine)」から派生したもののように見える。けれども、これは誤解のもとだ。英語の場合、mechanical は machine よりも早くから使われており、両者は長きにわたってあきらかに別々の意味をもっていた。語源はラテン語の machina の場合と同じく、あらゆる「装置・考案品」を表しており、一五世紀に使われはじめた mechanical（前形はラテン語 mechanicus）は、機械を使った工芸、じっさいには農業によらないおもな生産作業を表していた。その後、mechanical は社会的な理由で軽蔑を込めた階級的意味を帯び、こういった種類の仕事にたずさわる人々や、そういった人々をも

つと思われる性質を示すようになった。例としては、「肉体労働者 (mechanical) と貧しい身分の人々」(一五八九)、「最も卑しく (Mechanical) 汚らわしい輩」(『ヘンリー四世』第二部第五幕)、「低く卑しい (mechanical) 出自」(一六四六) といったものがある。一七世紀初頭からは、mechanical に「決まりきった、思考力を働かせない行動」の語義が現れ、それ以来ずっと使われた。これは今では機械の動きとの類推によるものと考えられるだろうが、この類推は一八世紀の半ばにはっきりと出てきている。けれども、最も早い時期の用法においては、「考えない」にまつわる社会的な偏見のほうも、少なくとも機械との類推と同じくらいには強かった。

machine は、一六世紀から組み立てられたものや構造物であればどんなものでもさしていたが、一七世紀になると動力を使った装置に限定されはじめ、一八世紀以降はさらに限定されて、相互に結びついて動く部分からできた、より複雑な装置をさすようになった。機械と「道具(tool)」との区別、「機械製(machine-made)」と「手製(hand-made)」の区別が出てきたのは、この段階の、とくに一八世紀末からである。だがその一方で、mechanical には強い影響力を持つ新しい意味が出てきている。それは、基本的には「力学・機械学」を表す mechanics という新しい科学をもとにした意味である。ボイルは一六七一年に、次のように書いている。

ここでは Mechanics という語を、より厳密かつ正式な私たちが習慣的に理解するような意味で使っているのではない。すなわち、動力機(連接棒、てこ、ネジ、くさびなど)や力を増幅させる機械装置を組み立てることに関係する学説だけをさすときに使われるような意味、要するに機械学という意味で使っているのではない。そうではなくて、むしろこの語をもっと広い意味で、つまり下位の物体に運動を起こしたり、その運動の形を変えることを目的に、純粋数学を応用することからなる学問領域、力学をさすものとして考えていく。

特定の実践に関する理論体系から運動の一般理論へ移行したことで、mechanics (力学・機械学) は宗教上のさまざまな理論と相互に影響を及ぼすようになり、じっさいには「唯物論」と重複することもよくあった。そのために、一七世紀の終わりになると「機械論的 (Mechanical) 無神論者」という言い方が出てくるわけだし、またそれがもとで一八世紀末には、宇宙のいっさいのものは物理的な (mechanical) 諸力によって生み出されるとする mechanism (機械論) が登場したのである。(mechanism は一七世紀末からあったが、「機械論」という意味が出てくる前は、おもに「機械装置」をさしていた。) だからこそ、mechanical (機械論的)、the mechanical philosophy (機械論哲学)、mechaical doctrine (機械説) が唯物論の思想の各種の形態であるとされ、

宗教思想家や観念論者が自分たちの一番の反対者を表すために、時に説明として使うこともあれば、ののしりの言葉として使ったりしたのである。最終的には、一九世紀の半ばから、「唯物論」はそのなかで mechanical（機械論的）な唯物論と歴史的・弁証法的唯物論とに区別されるようになった。

この語のおもな展開は今述べたとおりで、これについては理解するのが格段に難しいわけではない。しかし、一九世紀初頭になると mechanical がことのほか複雑になった。それは machine に新たな意味、つまり「近代的な機械」という意味が出てきて、それが mechanical civilization（機械文明）などの表現に拡大されて使われた結果である。「機械文明」といった場合、近代的な意味での機械を使ったり、それに依存した文化、今風にいえば「産業社会」の意と取ることができる。しかし一九世紀初頭、ある種の思想においては、この意味が「精神的」、「形而上的」、ないしは「観念論的」と対立するような mechanical の意味と結びつけられたり、融合されたり、混同されるといったことが起こった（コールリッジ、カーライルなどがその例）。それ以前はとても近い意味だった mechanical と「有機的（organic）」が明瞭に区別されるようになったのも、この時期のことである。「それだけで独立して」、「人間の労働に取って代わって」働きはじめた新しい「機械（machines）」は、神や神の導きの力なき宇宙という考え方を連想させ、たし、「決まりきった、思考力を必要としない行為」という古い（社会的な影響あつての）意味と、さらにそこから無意識の行為という意味を連想させたりもした。

mechanical が機械に直接結びつく記述的な意味を越えて使われた場合、その複雑さはおもやっかいなまま変わらず、昔の連想や融合は、それ自体が部分的には捨て去られている場合でも同じことだった。mechanical のこうした意味がじっさいどこから出てきたのかについても、その対立項として言外に意味されているさまじまなものについても、どちらもこれから検証を続けていく必要がある。

以上